

平成30年9月22日

地域密着型サービス運営推進会議報告書兼議事要旨

厚生労働省令第34号（平成18年3月14日）第108条の規定に基づき、平成30年9月18日に運営推進会議を開催したので、その記録を作成し、これを公表します。

千葉県長生郡白子町幸治3079番地3

設置主体) 株式会社 相生

代表者) 代表取締役 萩原 将之

事業所及び事業主体の概要

【事業所】 ゆうなぎ九十九里

(認知症対応型共同生活介護 通称：グループホーム)

(介護保険事業所番号) 1275900213

(所在地) 〒283-0102 千葉県山武郡九十九里町小関2316番地1

電話0475(70)7333 FAX0475(70)7335

(開設年月日及び共同生活住戸と利用定員)

平成17年10月 1日開設、利用定員9人(一番館)

平成23年 4月 1日開設、利用定員9人(二番館)

【事業主体】

〒299-4216 千葉県長生郡白子町幸治3079番地3

(商号) 株式会社 相生 (かぶしきがいしゃそうせい)

(代表者) 代表取締役 萩原 将之

電話0475(36)5711 FAX0475(36)5712

運営推進会議の概要

日 時：平成30年9月18日 13時30分から14時35分

会 場：当ホーム二番館のリビング

出席者：運営推進会議の構成

当ホーム

- ・ 計画作成担当者 内山 貴司（二番館担当、介護支援専門員）

委員

- ・ 地 域 住 民 2名（近隣の住民）
- ・ ちどりの会（ボランティア団体） 1名
- ・ 当町地域包括支援センター 1名

（議題）

1. 入居者情報
2. ゆうなぎかわら版の内容について
3. 入居者について

(議事要旨)

前回の運営推進会議（7月17日）から今日までの施設や入居者の様子について、説明を行う。また、『ゆうなぎかわら版8月号、9月号』の解説を行う。

1. 入居者情報 平成30年9月17日現在

一番館：男性3名 女性6名 小計9名

二番館：男性5名 女性3名 小計8名

計17名・うち九十九里町内の入居者は11名

内山) 現在、一番館の入居者数が9名、二番館の入居者数が8名となっている。年齢区分を見ると、90歳以上が5名と最も多い。次に85歳～89歳が4名となっている。保険者数については、当町（九十九里町）が11名と最も多く、次に大網白里市が3名となっている。また先日（9月15日）に、100歳となられた方が1名いる。

委員) その入居者は、九十九里の方なのか。

内山) 茂原市の方である。

委員) 現在は「人生百年時代」とも言われており、九十九里町でも100歳以上の方が、10名程いると言われている。

2. ゆうなぎかわら版の内容について

今回は8月号と9月号について、説明する。

内山) 8月号では、室内での写真を中心に掲載をしている。冒頭の文章では、熱中症と日射病の相違点等について記載をしている。9月号では、食事の様子（当ホームの近隣の「広瀬屋」に出前を注文）の様子を中心に掲載をしている。外食・外出の機会が少なくなってきたおり、「外食の代わりに出前を注文するのも良いのでは？」との意見もあり、実施をした。普段よりも、量が多めであったため、多少残された方もいたが、食事を楽しまれていたとのことである。冒頭の文章では、『認知症サポーター養成講座』のことについて記載をしている。認知症サポーター養成講座とは、「認知症とは何かについて理解を深めてもらい、認知症の方を地域で支えていくことを目的とした活動」であることも説明する。その他、入居者が塗り絵やオセロ、洗濯物を畳んでいる写真について説明した。

3. 入居者について

内山) (かわら版の写真、当該箇所を示しながら) こちらの入居者は、以前は他の方の洗濯物を畳むのを手伝ってくれた後に「これは全部私の物」と言われ、居室に持って行かれることがあった。その都度、記入されている名前を一緒に確認をしてもらった。現在は、同様の訴えは聞かれていない。畳んでもらったものを「居室に片付けておきますね」と伝え、その場で納得をしている。

委員) 物を取られるとあってしまうのか。

内山) 自宅等では、自分で洗濯物を畳み、片付をする。自分で畳んだ物を自分の物であると考えるのは、ある意味自然なことなのではないかとも思う。また、自分の居室の衣類ケース(カラーボックス)の中身を全て出してしまい、「服がなくなった」と強く訴えていた方もいる。ご家族からの提案で、衣類ケースではなく、自宅で使用していたタンスを持ちこんだところ、訴えが軽減した例がある。なじみのあるものを使用することで、安心して過ごしていただくことの大切さを再認識したできごとであった。

委員) 以前「認知症の方でも、全てを忘れるわけではない。怒られたことや不穏になった時の記憶は、心の中に残っている」という説明が印象に残っている。自分の生命に関わる感情は、最後まで残るとも言われている。喜怒哀楽の感情についてどのように考えられるか。

内山) 新しい出来事については、記憶に残らないことが多い。ご家族が面会に訪れたものの、後に尋ねると「今日、来たの?」と言われる方もいる。しかし「その時その一瞬」の感情は存在していると思われる。発語がほとんどなくなり、寝たきりに近い入居者がいたがm、クリスマス会の際、少しでも皆と一緒にいる時間ができればと考え、演芸会に参加をして頂いた。普段は、表情の変化に乏しいのではあるが、歌や踊りを観ている時には、穏やかな表情をされていた。このような外部からの刺激は、感情を呼び起こす大切な要素であると思われる。

委員) テレビで歌番組や落語を鑑賞する等、1日に1回は笑うことが良いとされている。ビデオを利用するのも良いと思う。

委員) 音楽の内容は正確に理解できなくとも、周りの人が笑っているという雰囲気大切であるとされている。

委員) 職員は認知症の方の様々な対応(徘徊等)をしているので、話を聞いてみると、やはり大変な仕事であると思う。

内山) 介護記録でも、徘徊という言葉を用いる場合がある。しかし徘徊とは本来、「理由もなく歩き回る」という意味である。入居者には「家に帰る」や「病院に行く」等、本人の中での理由が存在している。例として地域の方が外で認知症の高齢者を見かけた場合、外見からは認知症であるという判断はできないこともあって「徘徊をしている人」と考えてしまうのではないかと思う。この件とは別に、新しい方が入居をすると不穏になり「食事は食べない、具合が悪くなった。病院へ行く」と自ら外に出ようとされる方もいる。これも本人には理由のある行為である。その際には職員が説明をするよりも、入居者同士で会話をしている間に落ち着かれることも多い。入居者について「どのような考えの人か」を理解していないと、対応ができない事例である。

委員) 現在「断酒会」のように、認知症の方同士で小グループを設けて、サポートをしていくという動きがある。厚生労働省が各都道府県に指示を出しているとのことである。

委員) まずは医療と介護が連携をして情報を共有していくことが大切であると思う。地域の方とも情報を共有できると望ましいが、それが困難な場合もある。そのため最低限度の医療・介護職間での情報共有が必須となってくる。認知症とは特別なことではなく、当たり前の病気であると知ってもらうことも大切である。認知症とは、脳全体の5%が正常に機能しないことにより、発生するとされている(残りの95%は正常)。

委員) どのようにして、地域住民に認知症について理解をしてもらうのか。

委員) 認知症サポーター養成講座の開催等を実施している。高齢者を地域全体で支える「地域包括ケアシステム」という考え方があり、その他にも様々な活動をしている。

最後に次回の運営推進会議の開催日を平成30年11月19日の13時30分からと決し、散会した。

以上

本件のお問合せ先 グループホーム ゆうなぎ九十九里 内山 貴司 電話 0475-70-7333
--